

阿惟越致地論考

龍樹敎義と親鸞敎義の交渉より――

桑 原 昭 信

一 はじめに

浄土敎の相承のなか「阿惟越致」(本論文では紙数の都合より、梵語、原意等の説示は省略する)に類する言葉を遡ると、龍樹菩薩(一五〇～二五〇年頃)(以下、龍樹とする)の敎説が一つの基点と考える。それは難易二道の敎説であり、『十住毘婆沙論』(以下、『十住論』とする)の第九「易行品」を中心に説示している。そこには、

仏法有「無量門」。如「世間道有」難有「易」。陸道歩行則苦。水道乗船則楽。菩薩道亦如是。或有「勤行精進」。或有以「信方便易行」疾至「阿惟越致者」。

(『大正新脩大藏經』(以下、『大正』とする)二六・四一中)

とあり、曇鸞大師(四七六～五四二年)(以下、曇鸞とする)は『無量寿経優婆提舍願生偈註』(以下、『論註』とする)冒頭に依用し、その相承においては代表的なものである。後生ではその難易の敎説に依り、聖浄二門の敎判にまで発展を見せるが、

併説する「阿惟越致」への注目は薄いようである。そもそも、『十住論』所説の菩薩階位の初地へ入り安住する為の行法の説示である。難易二道の配別をすることではなく、阿惟越致という地位への定・不定にその中心があると考ええる。阿惟越致とは不退転という意であり、「地」の有無に関わらずその地位に在ることを表す。菩薩階位を解説する『十住論』ということより、本論文では「阿惟越致地」と題しているが、適時「地」の無い表現も用いることとする。

浄土敎家のなか、親鸞聖人(一一七三～一二六二年)(以下、親鸞とする)も龍樹の敎説を依用する一人である。『十住論』より上記の文も引用するが、阿惟越致に関する文を論拠の一つとし、己証の現生正定聚の益を顕示する。その証果論では龍樹の敎説が重要な位置付けにあると考えている。

先ず『十住論』所説の阿惟越致地、またそれに関わる敎説について検討する為、初出である第五「釈願品」の文に随い解釈する。そして、親鸞の理解が顕著に表れる具体的な文を

いくつか示す。浄土教の相承の一端ではあるが、親鸞の上に展開する『十住論』所説の阿惟越致地について論じていく。

二 『十住論』の「阿惟越致地」の説示

第二「入初地品」所説の入初地の八法のなか、「深心」の具足への解釈に示している、菩薩の十大願を「積願品」では詳述する。その第七願に説示される十種の浄土の相の第二「仏功德力」に初出がある。三世にわたる一切の仏の無量なる功德・智慧の深法は等しく差別はないが、その本願の因縁に随うものであるとし、その成就する威力の一つ一つについて解釈をする。そのなか、見仏の者について、

有「衆生」見「仏」即住「阿耨多羅三藐三菩提阿惟越致地」。何以故。是諸衆生見「仏」身「者」。心大歡喜清淨悅樂。其心即攝「得如」是菩薩三昧。以「是三昧力」通「達諸法実相」。能直入「阿耨多羅三藐三菩提」必定地。是諸衆生長夜深心種「見」仏入必定善根。以「大悲心」為「首」。

〔大正〕二六・三二下

と示し、続いて聞名の者について、

仏有「本願」。若聞「我名」者即入「必定」。如「見」仏「聞」亦如是。

〔大正〕二六・三二下

と示す。他の利益として「有「壽命無量」」、「女人見者即成」「男子身」、「有「聞」名者即得「往生」」、「有「無量光明」衆生遇者離「諸障蓋」」、「以「光明」即入「必定」」〔大正〕二六・三二下〕等があり、それぞれについても解釈している。上の引用文の

注目する個所を抜き出せば、以下の通りである。

「阿耨多羅三藐三菩提の阿惟越致地に住するなり」

＝
「阿耨多羅三藐三菩提の必定地に入るなり」

＝
「すなわち必定に入る」(※筆者が太字を施す)

直前の第四「浄地品」までは「必定」等の言葉をもって、不退の位にある菩薩のことや、初地におけるそれまでの修行段階を退失しないことを表現している。しかしここにおいては、その極果とする阿耨多羅三藐三菩提の阿惟越致地・必定地に入り住するとの説示より、『十住論』における「阿惟越致地」と「必定地」の語意の対応を確認することができる。

『十住論』に「必定」や「不退転」、また「阿惟越致」ということを説示する所為をうかがうに、様々な行法を示すなか、各品共に菩薩の心相にも言及していることに注目したい。第一「序品」では「堅心」を、「入初地品」では「深心」、「初発心」を、第三「地相品」では相続や常なる利を具える「定心」を、「浄地品」では菩提薩埵の解釈に、再度「深心」を示している。「堅」、「深」、「定」等はどれも「必定」の言葉に相通じると考える。菩薩自らが修治すべき行法が様々な説示されるが、さらにそれらが諸仏・諸菩薩の無量功德に依るという説示のあることに注意しなければならない。

阿惟越致地論考（桑原）

そして「釈願品」の後、第六「發菩提心品」では必定なる「初發心」・「菩提心」を、第七「調伏心品」では調順なる「調伏心」・「恭敬心」を示す。第八「阿惟越致相品」ではまさに阿惟越致地に在る菩薩の相を示し、この一段の肝要である「深心」を基に、惟越致の菩薩の相を対照的に示している。「易行品」では懦弱怯劣で大心なく、丈夫志幹ならざる者の易行開説の請いに呵責し戒めながらも、遂にはその請いに答えていく。そして、「恭敬心」に基づく諸仏への称名、聞名、憶念等の行法を説示している。以上よりその所為としては、頼りない未定初地の菩薩の為にその修行段階に必定し、退転せざることを事有るごとに言及することに注目される。どこまでもその菩薩の心情を理解しての、行法・心相の説示ということであろうかがい知るのである。

三 親鸞の「阿惟越致地」の理解

『十住論』の文を直に引用する場合や、偈文・和讃に龍樹やその教説を表現する等の依用方法がある。先ず主著『顕浄土真実教行証文類』（以下、『教行信証』とする）の「顕浄土真実行文類」（以下、「行文類」とする）では、本論文のはじめに引用する「易行品」の文の「阿惟越致」に、「フタイノクライナリ」（『浄土真宗聖典全書』（以下、『聖典全』とする）二・二三）と左訓を施し、顕著にその理解が表れている文である。

また他の著述のなか、『一念多念文意』に『無量寿経』、『無量寿如来会』の第十一願文、そして『無量寿経』の第十一願成就文を自釈する。（※筆者が番号を施す）

法蔵菩薩ちかひたまへるを、釈迦如来、五濁のわれらがためにときたまえる文のころは、それ衆生あて、かのくににむまれむとするものは、みなことごとく①正定の聚に住す。（中略）すなわち往生すとのたまへるは、正定聚のくらいにさだまるを②不退転に住すとはのたまへるなり。このくらいにさだまりぬれば、かならず③無上大涅槃にいたるべき身となるがゆへに、④等正覚をなるともとき、⑤阿毘跋致にいたるとも、阿惟越致にいたるともきたまふ。「即時入必定」ともまふすなり。（『聖典全』二・六六四）

それによれば、当面では「かの国に生ずれば」と読むが、「かの国に生まれんとするものは」と親鸞独自の読み方をしている。また、いくつかの文言に左訓を施している。

①「正定の聚」——「カナラズホトケニナルベキミトナレルナリ」

②「不退転」——「ホトケニナルマデトイフ」

③「無上大涅槃」——「マコトノホトケナリ」

④「等正覚」——「ホトケニナルベキミトサダメレルライフナリ」

⑤「阿毘跋致」——「ホトケニナルベキミトナルトナリ」

現来・当来とに得益の「時」を明確に分けていることがわかる。また、「阿惟越致」、「阿毘跋致」、「即時入必定」の文より、

そこに『十住論』所説の龍樹の教説を承けていることを、十分にうかがい知るのである。

親鸞はこの「即時入必定」の文を上記のように度々引用している。「易行品」の所謂、弥陀章の偈頌であり、

是諸仏世尊、現在十方清浄世界、皆称^レ名憶^二念阿弥陀仏本願^一如^レ是。若人念^レ我称^レ名自帰、即入^二必定^一得^二阿耨多羅三藐三菩提^一、是故常応^二憶念^一。以^レ偈称讃。(中略)

人能念^二是仏^一 無量力功德^一 即時入^二必定^一 是故我常念

(『大正』二六・四三上)

とある。直前の長行とそれまでの文脈より、阿耨多羅三藐三菩提の阿惟越致地・必定地に入るという意として、この「即時入必定」を解することが可能である。

以上の文より、親鸞も「阿惟越致」と「必定」、「不退」、そして「正定聚」という言葉をも同意として用いていることがわかる。また、上記の引用文には「疾」、「直」、「即時」と、その地位に入り定まる速さについても説示している。「即時入必定」の文の「即時」という「時」の問題に、親鸞が注目する為と考えるのである。

四 結びとして

『十住論』の「易行品」を中心として、菩薩が阿惟越致の地位に至り定まることを説示する。その地位とは必定地・不

退転地とも表わされ、阿耨多羅三藐三菩提、つまり極果を得る位、仏と成る身に必ず定まり、退転せざる位に在ることを示すものである。さらに「疾」、「直」、「此身」、「即時」等の表現をもって、この現生における事態として阿惟越致の地位に至り定まることを説示するのであり、まさに親鸞の己証である現生正定聚の益の論拠となるのである。もちろん「正定聚」については、『大経』の第十一願、またその成就文、そして第十八願成就文が文処ではある。しかし、その正定聚の利益を、現生において獲るとする論拠となるのは、龍樹の阿惟越致地に関する教説であることを、以上より確認することができた。また加えて、後生における『十住論』『易行品』を中心とする相承に見られる、「信仏因縁」、「仏願力」、「仏力住持」等の教説にも依ると考えることができ、それらの起因としてこの阿惟越致地の教説が一つの基点を担っている。親鸞が顕示する現生正定聚の益をもつて、それら全てが展開、発揮されているのである。

〈キーワード〉 龍樹、阿惟越致、親鸞、現生正定聚

(浄土真宗本願寺派宗学院研究生)